

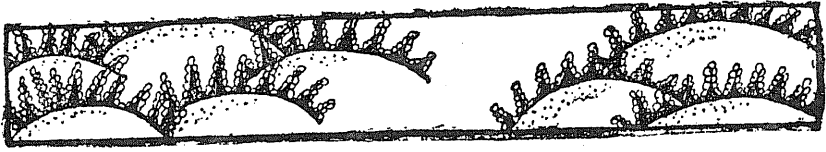
# 童話『兄ちゃんのだら』

一五・七・二・塚第一幼稚園にて全園児に話す

大塚喜一

此の前に幼稚園へよせて頂いて、お話をしたりお遊嬉を見せてもらつたりして面白く遊びました。あのお家へ歸つてしばらくしてから、兄ちゃんはお風呂へ入らうと思つて洋服をぬがうとしますとボタンがひつかかつて取れないのです。オヤと思つてよく見るとそこにはいつか知らぬ間に髪の毛が三本程引つかゝつてゐます。多分幼稚園でお遊びしてゐる間にどなたかのお毛がひつかかつてたのでせう。「どうしやうか知ら。どなたのだからわからないから返されないし。」と兄ちゃんも暫らく考へてゐましたが外に仕方がないのでそれを紙に丁寧に包んでポケットへなを<sup>な</sup>して置きました。それからお風呂へ入つて御飯をたべて電車に乗つて京都へ歸りました。

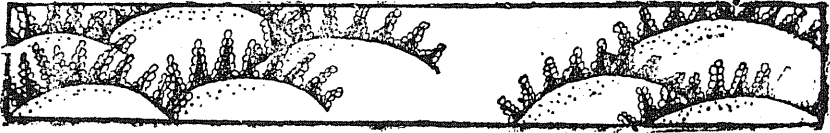
京都へ着いた時分にはもう日が暮れてあたりが暗くなつてゐました。電車を降りてから高い松の木の澤山に生えた道をお家へ歸りかけました。そしたらね高い木の上から螢が青



い光をポツポツと出して段々下の方へ飛んで降りて來ます。僕はハンカチでそれをとつて大事に包んで持つて歸りました。歸るとその螢をお部屋の中へにがしてやりました。電氣を消してお寢間へ入つて青い光を見てゐると螢はスーッと飛んで床の間の花に止りました。兄ちゃんはそのを見ながらいつの間にか寢入つてしまひました。

すると夜中に誰かが「兄ちゃん、大塚の兄ちゃん」つて呼びますので眼を開いて見るとそこには螢の風をした後へ青い提灯ちようちんの様な火をつけた可愛い、女のお兒さんが立つてゐらつしやいました。兄ちゃんは幼稚園のお兒さんか知ら？と思つて「ハイ」と返事をするところの螢さんは「兄ちゃん、今日あなたの洋服にひつかかつてゐた髪の毛はよいものですから大事にして置きなさい。學校へ行きしなにはそれを親指に、お山へ登る時は高々指に、さして好きな幼稚園へ行く時はそれを小指に巻いて行きなさい。」と云つて呉れました。

翌朝眼が覺めると兄ちゃんは寢卷のまゝですぐ洋服のポケットを探しました。そして昨日の紙包を開いて見るとビツクリしました。昨日の黒い髪の毛はきれいな金色に變つてゐるのでした。そこで螢さんに教へて頂いた通りにそれを親指へ巻いて學校へ行きました。するとその日は先生の仰おつしやる事がよく解わかつて大層よく勉強が出來ました。その日の夕方になると近所にゐる小學校四年生の生徒さんが二人で「兄さん螢とりに行きませう」と誘



ひに來ました。そこで長い竹の先へ、さを付けて

螢來い〜

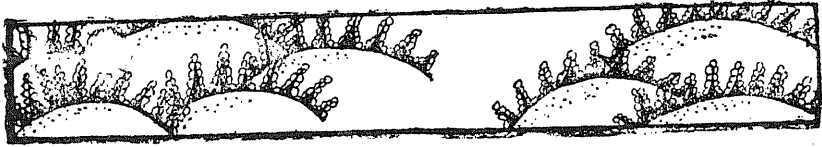
晝はお母さんの乳飲んで

晩には提灯高のぼり

と歌ひながら螢取りに出かけました。あつちこつちと螢を追ひかけてゐる中に僕一匹の螢を追ひかけて遠くの方へ行つてしまつてゐました。するとその螢はスーッと飛んで歸つて來て僕の耳の所へチョンと止つて

「兄ちゃん、幼稚園へ連れて行つてあげませう。」

そんなに云つて又先へ飛んで行きましたので兄ちゃんはその後からドン〜走つて追つて行きますとお山の麓の廣い野原へ來ました。向うの方には螢の光の様な色の、大きな螢の様なものが點つてゐます。段々側へ近づいて見るとそれは大きな螢の飛行機でした。僕は螢さんの云ふ通りにそれに乗せて貰ひました。前の方にはさつき僕に話をして呉れた様な螢のお嬢さんが乗つてゐてハンドルを廻すとプロペラがくる〜と廻つて、靜かに飛行機は動き出し頓て上の方へ昇つて行きました。下の方には街の火がきれいに並んでついでゐます。それが段々に動いて遠くへ見えなくなつてしまふと、僕は飛行機の椅子へつか



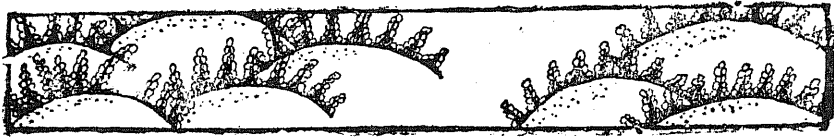
まつたまゝお眼々をつむつてじつとしてゐました。

頓て急にあたりが明るくまるでお日様がさした様に赤くなりましたのでふと眼を開けて見ると、兄ちゃんはいつの間にか幼稚園の砂場の所に來てゐました。砂場には山にはトンネルがあり川には橋がかゝつてゐてその間を汽車が通つてゐるなど、而白い景色が上手に出來かかつてゐる所でした。それにわるさの男の兒が折々それをつぶさうとするのです。

兄ちゃんが止めてもきかないで又しても壊しかかります。その時兄ちゃんはその金色の糸を思ひ出し「あ、いゝものがある」とそれを小指へ痛くなる程しつかりと巻きつけますともつ其のお兒も壊しに來ない様になつて、みんなで上手に出來た砂場の景色を眺めてゐました。その中お時間が鳴りますとみなさんはきれいに並んで此の遊嬉室へ入つて下さいました。

會集の初に少しのお唱歌をしてから、みなさんのお望に依り兄ちゃんは『夢の戦争』といふお話をしました。その時皆さんはいつもよりは一層面白さうにそして一生懸命に聞いて下さいましたので大層うれしく思ひました。それでお話がすむと次の歌を歌つて皆さんに聞いて頂きました。

ボクハ コタチガ ダイスキヨ



マルイ オカホデ ニコニコ ト

イツモ カワユク ゲンキヨク

ミンナ ナカヨイ オトモダチ

ボクハ ミナサン ダイスキヨ

オメメ バツチリ オトナシク

オテテ タタイテ オモシロク

オハナシ キイテ クダサルヨ

センセイ モ コタチ モ ミナスキヨ

カワイイ シヨウカ ヤ オユウギヤ

マタ オモシロイ オケイコ デ

ミンナ ナ ナ カヨク アンビマシヨ

唱歌が濟むとみなさんは急に兄ちゃんのぐるりへよつて来て大勢で兄ちゃんの身體をワツシヨイ〜と高くさし上げなされたので、兄ちゃんは困つて「コワイ〜」と云つてゐると、バツと眼がさめました。

兄ちゃんは今迄面白い幼稚園の夢を見てゐたのでした。枕許には、ゆうべ取つて来た螢が青い光をポツポツと出してゐました。

——終——